

市立函館病院はロボット手術センターを設置

ロボット手術センターの設置は
円滑に手術を進めるためと
手術の術式拡大への対応が目的

市立函館病院消化器科外科科長
ロボット手術センター長
笠島 浩行

昨

年9月5日ダヴィンチによる初の手術を直腸がんで成功させた市立函館病院（森下清文院長）は、今年3月に「ロボット手術センター」を開設した。米国インテュイティブサージカル社が1999年に開発した医師の手術を支援するロボット「ダヴィンチ」は精緻な低侵襲性手術をより安全に提供できることから道内でも導入する病院が増えている。同病院では消化器外科に続き、呼吸器外科、婦人科、泌尿器科でもダヴィンチの手術を開始した。

同病院が導入したダヴィンチXiは第4世代にあたる最新鋭機。ダヴィンチは数カ所の小さな穴からカメラや鉗子などの手術器具を挿入し、術者は3Dモニターを見ながら手術をする。体への負担の少ない手術が大きな特徴だ。消化器外科の笠島浩行科長は「ロボット手術センターの設置は円滑に手術を進めるため」と語る。

同病院でのダヴィンチ手術は各診療科で曜日を決めていたが、手術数の増加に伴って当初の枠では収まりきれなくなってきた。「センターの役割の一つは手術枠の有効活用を促進するため、診療科の曜日枠にこだわらないフレキシビリティな運用です。センター開設後は手術を希望する患者さんを持たせることが少なくなりました」

同病院で最初のダヴィンチ手術を担当した笠島医師は日本大腸肛門病学会専門医・評議員、日本内視鏡外科学会



「ダヴィンチはより肛門温存手術にも適しています」と話す市立函館病院消化器外科の笠島浩行科長

消化器・一般外科領域技術認定医などの資格を有する大腸がん手術を専門とする外科医だ。センター設置はダヴィンチ手術の術式拡大への対応も目的の一つである。現在、消化器外科が行なっているのは直腸がんだけだが、今後は結腸がんや胃がん、また消化器外科以外の婦人科などでも新しい術式が増えていく予定だ。

「ダヴィンチ手術は新しい術式をすぐに始めることはできません。当院が実施予定の手術を行っている病院の外科医の指導を受けることや院内の安全性を審査する委員会の評価など、術者の要件をクリアする必要があると、術者センターでは新しい術式の指導医の選出や連絡などを一括して対応します」

笠島医師は腹腔鏡手術治療と肛門温存手術を積極的に導入してきたが、同病院で行っている肛門温存手術は通常の腹腔からの操作に加え、肛門からもカメラと鉗子を挿入し直腸と直腸間膜を切除する経肛門的直腸間膜切除術だ。ダヴィンチのメリットは傷が小さく、出血も抑えることができること。そして複数の関節構造を持つ鉗子は人間の手より可動域があり、手振れを補正する機能を備えている。笠島医師は「経肛門的直腸間膜切除術は骨盤深部の剥離をより適切な剥離層を保ちながら行う最先端の治療方法ですが、ダヴィンチは肛門温存手術に対しても非常に適しています」と話している。